

Bonnie Wheeler, Robert L. Kindrick and Michael N. Salda, eds.:

The Malory Debate: Essays on the Texts of Le Morte Darthur

地平を開く日本のマロリー研究

この四半世紀のマロリー・スカラーシップほどに劇的な事実の発見と議論の新しい展開を見た研究領域はあるだろうか。本書に収録された各論文のトピックには、いずれも反論、反駁、そして新たな提案と解釈を導入すべき相手がある。それだけに従来の証拠の見直しと新しい証拠の上に立つ推論の運びは、読者に熱い興奮をあたえ、作品を手にとり議論に加わる気持ちをふるい立たせずにはおかない。標題どおりここに論争があり、議論の太い道筋を日本のマロリー研究者がつくっている。

依拠と対立のいずれであれ、大きく屹立する相手は W.マシューズの「マロリー改訂説」(キャクストン版の第5巻は作者が改訂した)と E.ヴィナーヴァのウィンチェスター写本にもとづく革新的な作品編集(キャクストン版より写本が著者の意図を反映しており、8つの別個の物語から構成されていた)である。

テキスト研究をテーマとする本書は3部からなる。第1部には遺稿に弟子筋の編集が加えられたマシューズの3論文が、第2部には狂信的なまでに彼を擁護する Moorman 論文に併置してキャクストン改訂説を相互に補強しながら展開する6論文が、配置されている。第3部では、5つの論文が今世紀の本文校訂の金字塔と称されるヴィナーヴァ版の編集ぶりを議論の中心に据えて、写本と刊本の本文それぞれを底本とする作品編集の長短所を論じ合い、互に異論を抱えながらも望ましい本文づくりのあり方を提言している。

第5巻の「ローマ遠征物語」を写本の半分に縮め、かつ写本が持つ叙事詩的な調子を他の巻と同質のロマンス的語り書き改めたのはマロリー自身であり、それゆえに最終原稿であるキャクストン版を本文校訂の対象とすべきである。1975年に口頭発表されたマシューズの主張は学界を駆けめぐり、冷静な分析を加える以前にキャクストン版を「家宝」として読み継いできた人たちの心情を揺さぶった。第1部で明らかにされた論拠は6点に集約される。キャクストン改訂説派にはその一つ一つを丹念につぶす作業が求められる。論争の一端を紹介してみよう。先陣を切るのが野口俊一論文である。第5巻に観察されるキャクストンの語彙や句を指摘し、個性的なマロリーの言葉づかいを標準化したのは印刷家であると主張した。これを文法の面(否定辞‘ne’と動詞‘to be’

の分布統計)から補強したのが中尾祐治論文である。両論文は本文異同のいわゆる‘accidentals’を扱うにすぎないと形容し、「辺境の地(日本)から算盤が」飛んできたと激越に応酬したのが Moorman である。Field は両論文をもって十分な言語的根拠を得たとした上で、キャクストンに可能な実質詞の置き換え(bear] boar; Barfleet (in the Contentin)] Barflete in Flaundres)を挙げ、さらにマシューズが北方方言とした語彙を逐一否定してみせた。

中尾はいわれなき挑発を冷静に受けとめて異同の‘substantives’探しに乗り出し、改訂論の行方を左右する種本問題に画期的な証拠を見いだした。従来、書き換えには頭韻詩『アーサーの死』、ハーディングの『年代記』、仏散文『メルラン』が必要とされてきた。しかし‘a braunche of olyue’を除く主な表現は、キャクストンが編集し1480年と82年に出版した Chronicles of England のアーサー治世の記述に存在することを探しあて、キャクストンは3種の種本を参照することなく書き替えが可能である道を開いた。

この指摘をさらに敷衍したのが高木真佐子と高宮利行の共同論文である。ハーディングを必要とした7例、『メルラン』の3例を Chronicles の参照で説明し、同書が内容の記述のみならず章分け区分(第2・8章)にも影響をあたえたことを明らかにしたのである。これにより両論文は、写本とキャクストン版は先行テキストを不完全に継承しているとのヴィナーヴァ説に従い、それぞれ相補ってオリジナル・テキストの復元を行う上述の Field 論文の試みを無効化することになった。

第3部のテキスト編集を扱うには紙幅がつかた。しかし所収論文に通底するのはアナル学派の作品接近であり、「モノ」としての作品理解を読む行為に取り込むことを可能にするような編集のあり方が模索されている。Cooper や Hanks, Jr.が提案する、現代との異質性、マロリーの時代性を保証するような校訂本づくりのあり方は野口が言うマロリー固有の‘performative text’づくりに重なってゆく。

本書の紹介は Blake 論文をもって閉じねばならない。ウィンチェスター写本(W)はキャクストン自身が作成を依頼し、同じコピーテキストしかもそれはマロリーの自筆原稿(M*)からキャクストン版(C)を印行した、との瞠目すべき説を展開したのである。Blake が出す状況証拠は魅力的である。しかしこのステマが成り立つにはヴィナーヴァ・フィールド説の X(M*のコピー)と Y(X と W との間コピー)の存在を支えるテキスト内証拠の扱い次第である。例えば、評者なら X

存在の証拠として本文異同(934.27; 1028,24 など)を挙げて反論したくなる。マシ
ューズ論への賛否がマロリー学を進展させたように、Blake は今新しいディベ
イトを読者に挑んでいる。

(D.S. Brewer, 2000, 1 colour frontispiece + xxxii + 420 pp., £ 45)

向井 毅 (鳴門教育大学)